

第4回 青山俳壇 受賞作品発表

監字 堀田富雄理事長

テーマ「食の句」

第4回青山俳壇の受賞作品が次のとおり決定いたしました。受賞者の皆様、おめでとうございます。幼稚園児から大学院生、校友、教職員、保護者、学院関係者など総勢1640名の方々よりご応募いただきました。たくさんのご応募、誠にありがとうございました。

最優秀賞

ゆ気かおる心ホクホクくりごはん

初等部3年 ■ 黒子 結風

わたしの好きな食べ物ベスト3に入ります。秋になると、おじいちゃんとおばあちゃんがくりごはんをたいてくれます。たける直前のあまいくりのかおりを思い出しながら、はいくにしました。今年も、くりごはんをたく山食べたいです。

選者
林 謙二

「食欲の秋」、秋はおいしいものが多いですね。炊き上がった栗ごはんのいい香り。「ホクホク」はおいしい栗の食感とうれしい気持ちとを上手に表していますね。

焼きなすの上でおどるよかつお節

初等部5年 ■ 高宮 彩乃

夏休みに遊びに行った祖母の家で、夕飯に大好きな焼きなすが出されました。熱々の焼きなすの上になつぷりとのかつお節が、湯気でゆらゆらと動く様子は、まるでおどっているようでした。わたしは、この時に見たかつお節のダンスを俳句にしました。

選者
片山 由美子

食べ物の句は、おいしように詠むことが大事です。その点、この句は熱々の焼きなすが目に見えるようで、匂いまで感じました。食卓に目を向けた句が少なかった中で、出色でした。

赤土の台地にはえし鳳梨かな

ほうり
鳳梨（パイナップル）

中等部1年 ■ 倉岡 千瑛

この夏に家族でハワイのオアフ島をドライブしていた時に見た、赤土の大地一面に広がるパイナップル畑の景色を詠みました。パイナップルではなく「鳳梨」という季語を使うことでその存在感や特別感を表現しています。このような賞を頂き光栄です。

選者
樺 未知子

私が毎年訪れる沖縄のパイナップル畑を過不足なく描いてくださった作品として評価致しました。日光を遮るものがない地に育つ果実の逞しさが見えて来る作品です。

かき氷空の青さをすくいけり

中等部3年 ■ 高島 広太郎

夏休みの青空の下で食べた冷たいかき氷を思い出しながらつくった俳句です。この句を通して、身近な幸せを大切にしたいと感じました。これからも心に残る景色を言葉にしていきたいと思っています。素晴らしい賞をいただき、ありがとうございます。

選者
大屋 多詠子

かき氷のシロップはブルーハワイでしょうか。シロップがまるで夏の空のように青いのですが、それを「空の青さをすくう」と上手にまとめました。

鋭角に割れ如月のチョココレート

校友 ■ 谷口 桂子

毎年バレンタインデーは家族にチョコをあげています。二月生まれの長男が大きな板チョコを割って食べようとした時、割れたチョコの断面の鋭角を見て、人生山あり谷あり……上手く乗り越えてねと、母の想いを馳せ詠んだ句です。素晴らしい賞をいただき光栄です。

選者
大屋 多詠子

バレンタインのチョココレートが割れてしまった、しかも割れ方が鋭く尖っているというのです。何やらこの後の恋の行方の危うさも予感させるような奥行きのある句となっています。

理事長賞

庭仕事スイカはおぼる昼下がり

青山学院関係者 ■ 入江 令子

選者 堀田 宣彌

自然と成長する庭の草、樹木の剪定作業。暑い日中、額からしたたる汗を拭き、休む時に出されたスイカはホッします。乾いた喉が待っていましたとばかりに口いっぱい頬張る様子が浮かびます。

院長賞

ゆかたきてじゃんけんかってチョコバナナ

初等部1年 ■ 笹川 美和

選者 山本与志春

浴衣を着て出かけたお祭り、お店でじゃんけんに勝ってチョコバナナをもう一本もらえたのでしょうか。その笑顔と喜びが軽やかなリズムとともに浮かんできます。私も嬉しくなりました。

初等部長賞

やきいもやおうごん色の甘い風

初等部2年 ■ 舟引 海

選者 小澤 淳一

今にもやきいもの甘い香りが漂ってくる感じがしますね。二年生農漁村の生活で収穫したさつまいももそんな香りでしょうか。

おせばとぶどこかににげるそらまめだ

初等部4年 ■ 友田 瑞希

選者 小澤 淳一

さが空に向かって伸びる空豆。予想もつかない方向に飛んでいってびっくりしたのですね。

中等部長賞

溶けていく祖母との距離もかき氷

中等部1年 ■ 三浦 礼生

選者 上野 亮

暑い夏の日、祖母と久しぶりに再会し、最初はぎこちなかった二人の会話も、かき氷を一口食べるごとに心の距離が縮まり、近しくなっていく様子が感じられる一句でした。

梨むけば話上手な祖母がいて

中等部3年 ■ 大川 彰煌

選者 上野 亮

ひとつの梨を分かち合う事によって、互いの心が通じ合う。食というのは単に食欲を満たすだけではなく、人と人との心を結びつけるものと改めてこの句を詠んで感じました。

高等部長賞

応募数が基準に満たず、今年度の賞はありません。

大学長賞

枝豆のやうに言葉を押し出だす

文学部日本文学科1年 ■ 新堀 笙子

選者 稲積 宏誠

言葉を「枝豆」にたとえる発想が新鮮。ぶちつと弾ける軽快さ。言葉が生まれる瞬間と「押し出だす」という古風な語のコントラストがとても面白い。

校友会長賞

一切れのトマトを食みて母逝けり

校友 ■ 大野 多恵子

選者 紀 正尚

恐らく小さく切ったトマトを母上の口に運び、言葉を交わしたのではないのでしょうか。静かな慈しみに溢れた句で、母上に対する深い愛情と大きな寂しさを感じました。

優秀賞

きらきらとひかりかがやくところてん

初等部2年 ■ 山口和真

青空ともぎたてトマトかじる音

初等部5年 ■ 大島結衣

おかえりととうもろこしがゆであがる

初等部6年 ■ 岡田六旦

夏休み家族で食べる晩ご飯

初等部6年 ■ 山田紗羅

涼風にとろけて甘きサーモン丼

中等部2年 ■ 川野毅

サイダーの泡がはじける音がした

中等部2年 ■ 鈴木遼太郎

ひとすくい夢の滴るかき氷

中等部3年 ■ 田沼瑠衣

たけのこや土の匂いに目をさます

中等部3年 ■ 畠山この芽

ラムネ飲む空の青さをそのままに

中等部3年 ■ 松本真帆

総評

今年もたくさんご応募いただき、ありがとうございました。いろいろな体験や思い出が俳句から伝わってきます。青山俳壇は夏に募集しているの、「かき氷」など夏の季語の句がたくさん集まりました。その中に「すいか割り」の句もありましたが、これは「食」ではなく行為なので選から外しています。俳句の基本は「有季定型」で季語が必要ですが、二つも三つもあると中心がぼやけてしまいがちです。できるだけ一つに絞りましょう。また、「や・かな・けり」は切れ字といいますが、切れ字は「...やうけり」のように一句に二つ入れてはいけません。来年もたくさんさんの句に出会えますように。自分にしか作れない、オリジナルな句を目指しましょう。

林 謙二

選者

氷菓紙め風の気配に耳澄ます

中等部3年 ■ 山田百恵

筍を割れば木漏れ日匂い立つ

大学院理工学研究科
博士前期課程1年 ■ 秋山知優

指先のおでんの湯気に染まりゆく

大学院理工学研究科
博士前期課程2年 ■ 下平真之介

冷奴四角四面は父譲り

校友 ■ 内田豊子

おかはりも大盛にして零余子飯

校友 ■ 久信田史夫

鯛焼の餡はみ出して焼かれをり

校友 ■ 久保田聡

本に背がパンには耳が万愚節

関係者 ■ 橋本孝輔

街路樹の熟れた山桃そっと食べ

教職員 ■ 田谷千歳

『放課後819倶楽部』

「青山俳壇」と連動して高等部生と俳句を学ぶシリーズ。ぜひご覧ください。



片山由美子

公益社団法人俳人協会会長、
毎日俳壇選者、「香南」創刊、主宰。
2013年俳人協会賞受賞。

權未知子

公益社団法人俳人協会理事、同人誌「群青」共同代表、
2018年俳人協会賞受賞、校友。

大屋多詠子

大学文学部日本文学教授、
父は俳人の大屋達朗、
俳句結社「天為」所属。

林 謙二

中等部国語科教師、俳人協会幹事、俳人協会教職員のための俳句指導講座委員、俳句結社「一筆」所属、校友。